特集 1

継承語として日本語を学ぶ子どもたち

「継承語」とは何でしょうか？

いろいろな定義があるようですが、わかりやすくいえば「家庭や身近な人と使っていることばだけれど、生活している社会や教育システムでは主要言語として使われていないことば」でしょうか。

国際結婚家庭や、両親とも日本人だけれど海外に長期滞在している〝永住組〟の子どもたち、さらにその第二、第三世代となる日系人にとって、日本語は「母国語」ではなく、思考の土台となる「母語」でもないかもしれません。

でも生まれてすぐ出会い、家庭でも日本語に触れていて、日本人というアイデンティティを持つ子どもにとって、日本語は「外国語」ともいえません。

そうした子どもにとっての日本語が「継承語」です。

「母国語」「母語」とはいえないけれど、「外国語」でもない……。そんな「継承語」とは、どうやって継承していけばよいのでしょうか。

それは世界中の多くの家族にとって、切実な問題です。

取材・文　松島 あおい

家では何語？

さっそく私事で恐縮ですが、筆者は国際結婚をしていてロンドン在住、十二歳の息子がいます。子育てを通して「継承語」として日本語を学ぶ、その難しさを痛感しています。

幼少期には同じ年ごろの子どもたちや日本人ママたちと、定期的に公園に集まりました。皆さん日本語の継承に熱意があり、いっしょに絵本の読み聞かせをするほかスイカ割りや豆まきなどもしてきました。やがて、それぞれ別の小学校に通うようになって、会う機会は減りました。そして子どもたちもいまや中学生となり、この機会に久しぶりに連絡をしてみると、「うちの子は補習校やめちゃった」「受験で忙しかったから日本語やってない」……。

幼稚園時代には日本語が堪能だった子どもでも、十歳を超えると日本語を学び続けるのは難しい、と実感しています。もちろんなんらかの形でがんばっている子もいますが、宿題がいやで日本語そのものを嫌いになってしまった子もいます。中学受験や、思春期もあり……そして、な

により漢字がたいへん！

家庭をめぐる言語環境はさまざまです。

ロンドンの一つの公園に集まった二十組ほどの家族だけをとってみても、母親が日本人で、父親はイギリス人やオーストラリア人など英語圏の人のほかに、フランス人やドイツ人、イタリア人など英語圏以外の欧州系、韓国人などのアジア系と多様な背景を持っていました。家庭内では二カ国語、外に出ると違う言語（英語）という家庭も少なくありません。

父親の方が日本人という家庭もあります。また働く母親も多く、ベビーシッターは違う国の人。子どもが一日をどの言語で過ごすのか、バランスもそれぞれ違います。

そんな国際結婚家庭で、子どもに何語で話すのがいいのか……。

バイリンガル研究では「一人一言語の原則」が提唱されています。赤ちゃんのころから、お母さんが日本人なら日本語だけ、お父さんが現地の人なら現地語だけで徹底する、ということです。でも誰もが出産前に「継承語」や「一人一言語」などの意味を知り、理論武装するわけはありません。誕生した赤ちゃんと自然に話をするだけです。母語重視の人もいれば、現地語重視、二言語とも重視、そして自由放任の人も……。

第三世代の子どももいます。たとえば祖母が日本人で祖父がドイツ人、母は日本のインターナショナルスクール育ちでアメリカの大学に行き、現在はロンドンでシングルマザーという家庭があります。毎年夏には日本に帰国するし、家庭で日本語も使いますが、お母さん自身が「“Heart to heart”（腹を割った）の会話は英語なの」と言います。

また日本人同士の夫婦で「家では日本語」を徹底していたけれど、子どもが小学校で悩みがあり、日本語では説明できないので英語で聞いてあげたら、その後は家庭での言語が英語に転換したという例もあります。

親子の言語は、継承語うんぬん以前に、どのような人間関係を築いていくのかが最優先なのです。

でも、家庭内で何語が話されていようと、日本にルーツを持つ子どもたちは、家では日本の食べものを食べ、日本に行って祖父母に会うのを楽しみにしています。日本に住んだことはなくても、夏休みに遊びに行く楽しい場所、おいしいご飯を食べるところ……。さらに最近では、ロンドンの若者に、日本は〝クール〟と思われています。

みんな日本が大好きなのです。

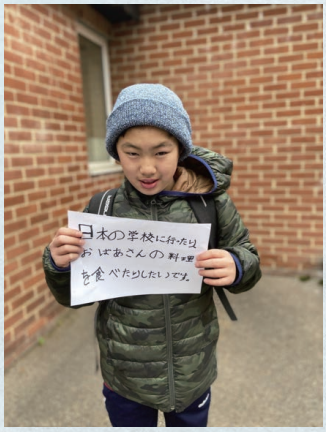
海外で育つ子どもにとって日本との〝絆〟とは？

ことばを継承するには、日本とのなんらかの〝絆（きずな）〟が大事になります。

日本が大好きな十代の子どもは、どんな絆を持っているのでしょう。

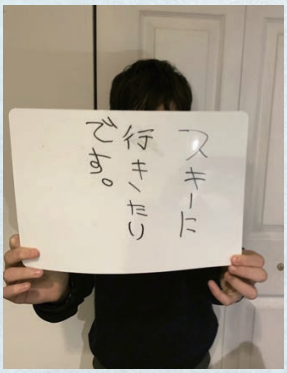
「コロナ禍が終わって日本に行ったら何がしたい？」「日本と聞いて何を思い浮かべる？」「日本で何が食べたい？」ということを「もしできたら日本語で書いてくれる？」と、あちこちの十代に頼んでみました。

思春期で顔を出したくなかったり、親の言うことを聞きたくない年ごろでもあったりしてなかなか難しかったのですが、「やるよ！」とこたえてくれた何人かを紹介します。



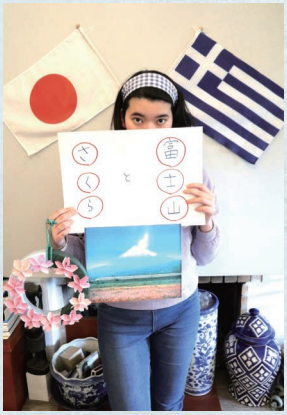
イギリス在住
11歳

４年前に日本で小学校に体験入学しました。
家では、お父さんとは広東語と英語、お母さんとは日本語で会話。
土曜日には、日本語の補習授業校のあと、チャイニーズスクールで広東語もがんばっています！



イギリス在住
12歳

３年前に日本で初めてスキーを体験。イギリスには山がありません！
オンライン教室で日本語を勉強しています。



ギリシャ在住
17歳

手に持っているのは、日本と聞いてパッと心に浮かんだこと。
折り紙で桜のリースをつくりました。

ギリシャの日本人学校は、2012年に閉校しました。その後、保護者たちが自ら日本人会のなかで育児サークルを立ち上げて、日本語や日本文化を継承してきました。

アメリカ在住　12歳

アメリカの現地校で日本文化を紹介するときに使ったパネルを持って

日本語がとても上手で、頭の中は日本語六対英語四くらい。「日本文化が大好き！」ということなので、お話を聞きました。

日本語は、オンライン教室で勉強しています。

日本語の学習で好きなのは、俳句などをつくるときです。季語を使って表現するのが楽しいです。最近つくった作品です。

窓ガラス
吐く息曇る
冬景色

日本語は滑舌や発音が難しいです。たとえば「飴（あめ）」と「雨」の違いをときどき間違えてしまいます。

日本の学校に三回体験入学したことがあります。

教室を自分たちで掃除するのはアメリカではないことなのでたいへんでしたけど、とても面白かったです。また行きたいです。

でも姉は体験入学にあまり行きたくないかな。漢字とかあまり得意じゃないので。

（姉妹で違うのはなぜでしょう？）

多分、どちらの文化に興味があるかだと思います。

姉はハリー・ポッターやファッションに興味がありますが、私は日本のアニメやマンガが大好きです。

日本語ができてよかったと思うのは、マンガを原文で読めることです。最近読んでいるのは、『約束のネバーランド』や人気のある『鬼滅の刃』です。

アメリカでも、マンガの原文を読みたくて日本語を勉強する人もいるのですが、私はわざわざ勉強しなくても原文で没頭できるのがうれしいです。

マンガのほかにも、「ボーカロイド」という、機械に音声を入力して、声の高さを調整して曲をつくるものがあって、それをよく聞いています。YouTubeの日本のマルチクリエイターのクリエイターさんたちで、歌や声で配信してる作品を見ています。

私は近いうちに、日本に一、二年くらい住んでみたいです。

そして、アメリカの身近な人たちに日本のポップカルチャーや新しい文化を教えてあげることができたらいいなと思います。

ないない尽くしの継承語教育

日本が大好きだけど、「継承語」として日本語を学び続けるのは難しい、これは世界のさまざまな国でも見られる現象ではありませんか？

その難しさが特に顕著に見られる場が補習授業校でしょうか。

ご存じの通り、補習授業校とは一般的に日本の「国語」等のカリキュラムを現地校の授業がない土曜日の午前中などに行う学校です。授業時間が限られているのでおのずと宿題も多くなりますから、入学前の説明会で「家庭学習が大切です」と強調するところも多いのではないでしょうか。

小学一年生の入学説明会に参加した公園仲間のママ友たちはやる気満々でした。幼児期に日本語のシャワーで育てているので、すでにひらがなは読めるし、自分の名前を書ける子もたくさんいました。ロンドンの補習授業校にはそもそも「第二母語としての日本語の習得」を目的とする日本語科もありますが、ゼロから日本語をというわけではありませんから、みんな小学部に進みました。

こうして日本で「母国語」として学ぶためにつくられた「国語」のカリキュラムを、「継承語」として学ぶ子どもと、「母語維持」のために学ぶ駐在員家庭の子どもがいっしょに学びます。当然、学年が上がるにつれ、継承語組は宿題の漢字にあえぎ、母語維持組は帰国に備えなくてはと焦り、日本でつくられた指導要領で教える先生が板ばさみ……。

そして学校の立場は〝家庭学習の補助〟。すべては保護者にかかっているのです。

ちなみに補習授業校で学ぶ以外にどんな学習法があるでしょうか。大都市のロンドンなら選択肢は多そうに見えます。しかし日本の受験向けの塾は目的が違います。日本文化を楽しむ目的のプレイグループだけではもの足りません。そうかといって我が子が通信教育や反復ドリルをひとりで黙々とやっていけるとは思えません。日本語の本を読み聞かせ続けようにも、理解力と読解力のレベルが合わなくなっていきます。

「継承語教育」は、まだ試行錯誤の段階です。もう二十年ほど前に桜美林大学の佐々木倫子教授が、継承語教育を評して「ないない尽くしの教育」と警鐘を鳴らしています。カリキュラム、教材、教師研修、適切な評価法もない……と。

「なぜ日本語を勉強しなきゃいけないの？」

そもそも継承語とは、母語と違って〝できなくてはならない〟わけでもないところが問題です。日本に帰国して学校に行くという目的もなく、どこまで何を勉強するのか明確ではありません。〝おばあちゃんと話せるように〟と学ばせる人もいれば、〝子どもと将来話せなくなる〟という危機感のある人もいますが、どこまで何を学ばせるか明確な人は少ないですし、なかなか思い通りにはいきません。漠然と〝ペラペラにしたい〟〝子どもはことばをすぐ覚えるから〟と思っていると、やがて壁にぶつかります。

そして周囲や子ども本人から「なぜ日本語をやらなきゃいけないの？」と、根本を揺るがすようなことも言われます。「日本語は家庭で話していれば十分」「漢字の勉強なんてかわいそう」「母親自身が現地語を勉強しろ」……いろいろ批判されるなか、揺るがぬ思いがないと続きません。

ここで大事なのは、子どもたちのルーツとして日本があり、それはアイデンティティの一部だということでしょう。だから、できれば日本語も話し、読むことができたらいい……それは誰もが感じています。

こんな悩ましい子育てのなか、私は息子の小学校入学時にこんなメッセージを受け取りました。

「息子さんの日本語力はきちんとキープしてください。あなたの大事な役目です」

アドバイスの主は駐在員で子育ても一段落した男性。軽い気持ちだったのでしょう。でも、ちょっと待って。継承語は〝キープ〟ではなく、日本とのつながりからつくり出さなくちゃならないのよ！　息子は日本は大好きだけど、今後はどうつなが

っていくの？　日本語の宿題をさせる向こうに、何があるの？　さまざまな思いが込み上げました。

一方で継承語教育の問題点として、「親の過剰な期待と介入」と「子どもは受け身」が挙げられています。がんばっているのは親で、子どもはついてきているだけ。しかも親にとって日本語は母語であるために、子どもがなんでわからないのかわからない。些細（ささい）な間違いも〝どうしてできないの〟と減点法で見がちです。外国語だったら、子どもがひとことでも覚えたら褒めるのに。宿題をめぐって親子でケンカになってしまうこともあります。

継承語教育において、保護者は〝大事な役目〟を果たすべく奮闘しています。プレイグループを立ち上げ、教材を探し、手づくりし、子育てしながら継承語教育について大学院で研究をする人もいます。

我が家の継承語教育を支えてくれたのも、ベルギーで同じ思いを抱えるお母さんでした。息子は補習授業校ではなく、彼女が立ち上げたオンラインの教室に参加し、ベルギーやドイツにいる子どもと共に、ハンガリー在住の先生と日本語を学びはじめました。教材は国語の教科書で、先生側も試行錯誤でした。やがて帰国などご家庭の事情もあり、先生も変わり、六年生まで続いたのは息子ひとり。片やロンドンの補習授業校も、一年生のときは七クラスありましたが、六年生は二クラスだったそうです。そして、その先はどうしようか……。

十人十色、百人百色の子どもたち

継承語として日本語を教えていらっしゃる先生に話を聞きました。

荒木泉美さんは、現在アメリカのバージニア州を拠点として、おもにオンラインで日本語・国語を教えています。ボストンの補習授業校の先生や日本の塾の講師としての経験を生かし、現在は独立しています。

生徒は、駐在員家庭や国際結婚家庭など親の言語として日本語を学ぶ子ども、日本文化に興味を持つ母語が英語の子ども、さらに日本に住むアメリカ人の大人など、ほんとうにさまざまです。つまり日本語を、「国語」、「継承語」、「外国語」として教えているのです。

「国語教育では、日本語を読みこなして文章表現やコミュニケーション能力を育みます。日本語教育では、日本語の文字の習得や発音を教えて文法構造を積み上げていきます。季節に合わせて文化を紹介することもあります。そして母語でも外国語でもない、第二の母語としての継承語ですが、これは教え方にマニュアルがなくほんとうに人それぞれで、十人十色、百人百色です」

継承語では、日本語指導法として習得した直接法（日本語のみで教える）と間接法（英語で日本語を教える）の両方のスキルを駆使しているそうです。

「日本語がある程度わかる子には日本語のみで教えますが、難しければ、その子のレベルに合わせてことばを言いかえたり、いっしょに考えたりしています。たとえば〝冬眠〟ということばがわからなかったら、〝冬になると、動物が穴や土の中に入って、春になると出てくることは、英語で何と言うの？〟〝ああ、Hibernate！〟という具合です」

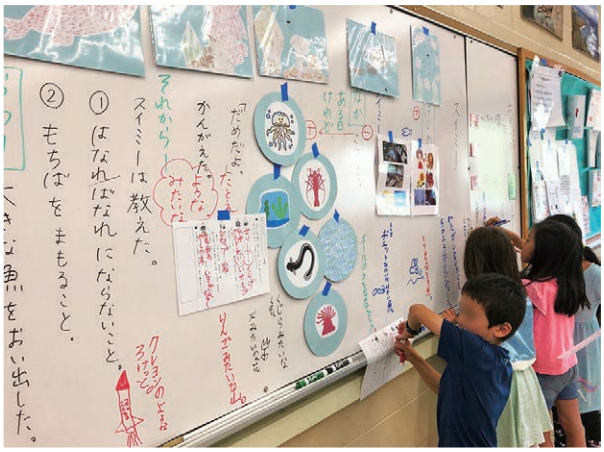
人それぞれとなると、教材はどうしたらいいのでしょうか。最近も、保護者から〝国語は教科書を軸に学べばいいけれど、学年が上がるにつれて理解ができなくなってしまったが、ほかに教材がない〟と相談を受けたそうです。

「小学一年生から国語の教科書を使用して学習を進めていた生徒さんが、小学三年生になって、説明文や身近ではないテーマの文章などを読み解くときにつまずきはじめます。漢字も増えますし、文章も抽象的な

荒木泉美さんプロフィール

大学卒業後、金融会社勤務。海外で働くという夢をかなえるため、旅行会社に転職。海外勤務中、夫に出会い、一男二女を授かる。三人の子育てに追われるなか、日本語教師の資格を取る。現在、アメリカ・バージニア州在住。塾講師、補習校教師の経験を生かし、国語と継承日本語と日本語とをオンラインで教えている。生徒一人ひとりに合わせた学習方法を実践している。

https://www.izumiaraki.com



補習校の国語クラスで2年生「スイミー」の授業。視覚教材をふんだんに使い、ことばと意味の理解を深める。

お礼のカード。6歳から日本語を教えている春樹くんはおじいさんが日本人。
3世代目として、日本語を受け継いでいく。

表現が増えて、語彙力がなければ読解できません。〝小四の壁〟といわれますが、じつはそれまでの蓄積もあって、少しずつ差は広がっています。現地校で一日のほとんどを英語で過ごし、思考も現地語の方が楽になり、自我も発達して〝どうして日本語を勉強するのか〟と問題意識を持ってくる子どももいます。なかなかちょうどいい教材がないのです」

だからその子の年齢、家庭での言語背景などを考慮して、それぞれに教材をつくることが必要となってきます。

「まず単刀直入に〝英語と日本語どっちが得意?〟と聞くと、〝英語〟と答える子が多いです。次に〝日本語をどう学びたい?〟〝日本語を勉強してよかったことは?〟と聞いてみます」

その答は、日本の家族と話せる、漫画が読めるなど、いろいろです。

「その子の興味があることから入り、意欲を持たせることがいちばん大事です。漫画でも歌でもいいし、それぞれです。そこから何か引き出して、クイズやゲームもとり入れて、新しいことばや漢字を覚えたら使ってみるように促して、生きたことばにしたいと考えています。日本語では理解していなくても、英語でわかっていたら、両語を合わせて頭に入れて、使っていく。カタカナを忘れる子には、カタカナを使った看板が並ぶ日本の風景写真を見せて、〝日本に行きたいね〟とモチベーションが上がるようにする。歌が好きな子とは、童謡などを使って、そのなかに出てくる一、二年生レベルの漢字を学ぶ。歌なら、お母さんといっしょに歌ってつながることもできますね」

継承語とは家族のことばですから、家族のつながりがより重要になってきます。

「家族がチームとして、どういうふうに日本語を学ぶか意識的かつ意欲的に考える必要もあると思います。でも現在は核家族で孤立して子育てをしている家庭も多いので、私のような教師や補習校の先生や、日本のご家族も含めてチームになれたらいいですね。私も生徒さんとの〝絆〟を大事にしています。教室で話を聞いて、共感したり、褒めてあげたり、日本語ってたいへんだよね、どうやったら続けていけるかな、と話をしたり」

荒木さんご自身が、高校生・中学生・小学生の三人のお子さんを育てるお母さんでもあります。

「夫は日系アメリカ人で、日本人のマインドを持っていますが、彼の仕事場でも子どもたちの学校でも、使うのは英語です。意識をしていないと、日本語から離れてしまいます。だから私たちは〝家では日本語〟と決めました。子ども同士が英語で話しはじめても、我が家では〝日本語ね〟と言っています。でも、ご家庭によって事情はいろいろですね。家族で日本語を話せない人が疎外感を持ったらかわいそうだし」

いっしょに育っていても、子どもたちの個性は三人三様で、日本語については末っ子の娘さんが最も得意だそうです。でもみんな日本は大好き。

「〝継承語を学ぶ〟とは家族が話すことばを学び、伝統文化に関する知識を深めること。自分が何者であるか、アイデンティティの形成にも役立つと思います。その子が自分らしく生きていくことを支えるために、日本語教育は何ができるのかを考え、一人ひとりの気持ちを大切に尊重し、共に学んでいきたいと思います」

パラグアイ日系社会の子どもたち

二月のある日、曇り空で寒いロンドンでZoomの画面を開くと、次々に四人の子どもたちが登場しました。みんな半袖姿です。「いまは夏休み！」。彼らが住んでいるのは南半球、南米のパラグアイです。

パラグアイは、南米のハートと呼ばれる国です。南米大陸の真ん中に位置し、ブラジル、アルゼンチン、ボリビアに囲まれています。公用語はスペイン語で、国土の面積は日本の一・一倍、人口は東京の約半分。首都アスンシオンは東京の杉並区くらいの人口で緑豊かな街です。

アスンシオンの街並み

その首都に住む十一歳の吉崎愛さんと九歳の愛美さん姉妹、そして十四歳の諸橋雄介くんと十二歳の洋くん兄弟は、いとこ同士です。南半球ですから、夏休みは十二月から二月半ばまで。今年の夏は雨が少なくて、気温は四十五度くらいまで上がっていたそうです。

「夏休みは何をしたの？」と聞くと、愛さんが「ピラポのおばあちゃんの家に行きました」。「ピラポってどんなところ？」「ここ（首都）から（車で）六時間くらいのところで…田舎です」「大豆やトウモロコシなどの畑があります」と雄介くん。

ピラポとは日系人の移住地域の一つです。四人のおばあさんは、六〇年代に日本から移住した日系一世なのです。パラグアイには日系人移住地が六つあり、さらに都市に住む人を合わせると、約七〇〇〇人の日系人がいます。

この四人はパラグアイ育ちの日系三世です。日本には行ったことがないか、あっても小さかったという子どもたちですが、「好きな日本の食べものは？」と聞くと、「ラーメン！」「唐揚げ！」「シャケ！」。日本の子どもたちと変わらぬ答です。ちなみに「パラグアイの食べもので好きなのは？」と聞くと、「エンパナーダ！」「チパ！」。私が知らないのを察した六年生の愛さんが携帯で画像を見せてくれ、雄介くんが「エンパナーダは、餃子のように、皮に具を詰めて揚げたもの。チパはもちもちしたパンで、チーズなどが入ってます」と説明してくれました。

チパ

じつは私が目を白黒させていたのは、話の内容だけでなく、四人の日本語があまりに自然で流暢（りゅうちょう）だったからです。

地球を半周しても母語は日本語

いうまでもなく、異国の地で世代を超えて言語を継承するのは難しいことです。南米には日系人も多く、特にブラジルには二〇〇万人といわれていますが、ブラジルの公用語であるポルトガル語へのシフトは二世で三〇～四〇パーセント、三世になると七〇パーセントになるといわれます。日本語の読み書きになると、さらに保持率が下がるそうです。（中島和子著『バイリンガル教育の方法』）

今回の取材を受けてくれた四人は、平日はアスンシオンでスペイン語の現地校に通っています。でも現地校が早めに終わるので、週三回、平日の午後に日本語学校にも通っているそうです。ですから事前に「日本語が上手な子」とは聞いていたのですが、取材が進むうち、筆者の認識が少し異なっていたことに気づきました。

たとえば「日本語を勉強していてよかったのはどんなときですか？」と質問をしたとき、雄介くんが「日本語はあたりまえなので、あまり考えたことがないけど……」と呟（つぶや）いたのです。少し戸惑いつつも、弟の洋くんは「漫画やアニメが見れるのがうれしい」と〝鉄板〟の答。雄介くんも「卓球をやっているのですが、日本は卓球が強いので、YouTubeなどでスキルのビデオを見ていま

卓球をする雄介くん

卒業式の日に洋くんを囲んで

愛美さんと愛さん

す」。そして愛美さんはうれしそうに、「日本関連のイベントに参加できること。着物ショーが楽しかった！」。

着物ショー？と私が首を傾げていると、お姉さんの愛さんが写真を見せてくれました。かわいい着物姿の姉妹のほか、たくさんの女性たちが華やかな着物姿で、舞台で踊っています。ニャンドゥティというパラグアイ伝統のレース細工の髪飾りやショールをつけている人もいます。これは二〇一九年に、日本とパラグアイの国交樹立一〇〇周年を記念して行われたイベントの写真だそうですが、みんな楽しそう。よく海外で行われる日本の文化紹介イベントではなく、日系パラグアイ人のお祭りです。

日本とパラグアイの国交樹立100周年を記念して行われたイベントで

こうして日常的に日本語を話す環境で育つ子どもたちに、これまでほかの子どもに聞いたような「日本に行ったら何がしたいですか」というような質問は、ちょっとピントが外れていました。気を遣って愛さんは、「ディズニーランド」、雄介くんは「大阪に行って、本場のたこ焼きが食べたい」と答えてくれましたが、私の戸惑いを察して、また雄介くんが説明してくれました。

「僕たちにとって、最初に覚えたことばは日本語で、家でも日本語です」

愛さんも「私もスペイン語よりも、日本語の方が楽です」。

つまりこの子たちにとって、日本語は継承語ではなく「母語」なのです。パラグアイだから母国語ではないけれど、別に日本に行きたいとか、憧れて日本語を勉強しているわけでもありません。毎日家庭や日本語学校、生活のなかで使っている、あたりまえのことばなのです。

「パラグアイの日系人社会は、総じて日本語のレベルが高いといわれています」と、四人を紹介してくださったアスンシオン在住の平岩佐江子さん。昨年の本誌十二月号にAG5レポートを寄稿いただいた縁で、今回もご協力いただきました。

「それは、日系一世のかたがたがご健在だからです。パラグアイでも、先生たちは世代交替し、パラグアイ人と結婚する人も増えています。そんななかで、この子たちは特に日本語が上手です」

平岩さんご本人は生まれも育ちも日本ですが、日本で出会った日系パラグアイ人のかたと結婚し、首都アスンシオンに住んで十年。ふたりのお子さんを育てています。

「首都のアスンシオンでも人が優しくて、子連れで歩いていると、道行く人が荷物を持ってくれたり、いつも助けられています。パラグアイの人はいろいろな面で大らかで、日系人同士が日本語で話していてもまったくいやな顔もされないし、いやな目にあったこともありません。パラグアイ人は争いを好まず、その昔スペイン人が来たときも抵抗せずに迎え入れたそうですが、こうして日系文化を保つことができるのは、文化を受け入れる大らかさのおかげだと思います」

日本から地球を約半周した場所で、そんな大らかさに包まれて、日本語を母語として暮らす子どもたち……。その原点が知りたくて、ピラポにいる四人のおばあさんで、日本語学校

の校長もされていた工藤悦子さんに、お話を伺うことにしました。

パラグアイ日系社会の始まり

工藤悦子さんが現在のパラグアイのピラポ地区に移住したのは一九六三年、十五歳のときでした。それまでは岩手県で生まれ育ち、実家は農業を営んでいました。

「移住は父の決断でした。耕地が狭かったので生活は苦しく、父は出稼ぎもしていましたが、もう家族と離れての生活はいやだったのでしょう。母や親族は反対しましたし、私も複雑な心境でした。美容師を目指す夢があったので……。でも政府が〝南米に移住したら暖かいし、広い土地がもらえる〟と宣伝していたのです」

当時の日本は、いまから想像ができないほど貧しかったのです。そして打ち出された対策の一つがアメリカやブラジルなどへの移民政策でした。戦前から始まっていて、パラグアイに初の日系移民が到着したのは一九三六年、戦争による一時中断を経て、五九年に移住協定が交わされました。

工藤さんとご両親、そして当時五年生、一年生、五歳だった弟妹の六人家族が故郷をあとにしたのは六三年三月、工藤さんの中学校卒業式の数日前でした。

「校長先生は私ひとりだけ先に卒業式をしてくださいました。駅では町内会の人たちが列になって見送ってくれました」

横浜で移民船「さくら丸」に乗船すると、福島県や秋田県、高知県などからの人々が乗っていました。ここから五十日を超える船旅です。

「途中でハワイやサンフランシスコなどに寄港し、私にはとても楽しい旅でした」

パラグアイに向かう七家族は、アルゼンチンのブエノスアイレスで下船し内陸へと向かいます。〝国際列車〟とは名ばかりで、「ガタガタ揺れる木の箱のようなもの」だったそうです。列車を降り、国境の滝の下流で川幅が三キロもある大河を、いまにも沈みそうな小舟で渡りました。対岸には先に移住した日本人がトラックで迎えにきてくれましたが、現在なら車で一時間の道も、当時は丸一日ほどかかりました。

やっとピラポに到着したのは五月二十六日、パラグアイは冬の季節で、翌朝には霜が降りていました。

「暖かいイメージだったので、なかには夏物しか持ってきていないというかたもいました。先に移住したかたがランプや缶詰めなどを準備してくれて、焚き火でご飯を炊きました。各入植者に割り当てられた区画には収容所と呼ばれる建物があり、着いた当初はそこで寝泊まりしました。屋根と囲いだけの体育館のような場所でしたが、それだけでもありがたかったです。それから自分たちの土地の中にテントを張ったり、ヤシの葉っぱを屋根にした仮小屋を建てたりして移り住んでいったんです」

日本海外移住振興株式会社（現在のＪＩＣＡ）がピラポ移住地に購入した土地の総面積は約八万四〇〇〇ヘクタール。入植者の各家族には三十ヘクタールずつ割り与えられました。東京ドーム六個半近い広さです。でも巨木が立ち並ぶ原始林で、農地として開拓しなくてはなりません。

「家族ではとても倒せず、パラグアイ人の力を借りましたが、木の下敷きになる事故もありました」

木を倒して、山焼きをしても大きな切り株や根は残りました。大木や切り株がゴロゴロと転がっていましたが、その間の少し空いた場所にとりあえずマンディオカ（キャッサバ芋のこと）や野菜のタネを蒔きました。ブルドーザーで切り株を除去し、トラクターなどを使えるようになるまでに、十年かかりました。

入植してからの工藤さんは、明けても暮れても農作業の手伝いでした。

「弟や妹はまだ小学生だったので、移住地から五キロほど離れたスペイン語学校まで歩いて通いましたが、雨が降ると赤土が粘土状になって、通学できませんでした」

こうした入植者の努力で開拓され

赤土の大地にいまは広大な農地が広がる

た赤土の耕地に、現在は大豆やトウモロコシなどが栽培されています。日本人がさまざまな野菜をパラグアイの食卓に届けたといわれ、大豆は主要な輸出作物となっています。

パラグアイ日本語学校の始まり

工藤悦子さん

やがて工藤さんは結婚し、四人の娘に恵まれます。そのころには生活に少しゆとりも生まれてきました。

「子どもたちが学齢期になり、日本語の読み書きも覚えてほしいという気持ちが芽生えました」

移住者の子どもたちのため、そして次世代の誕生に伴い、各移住地で日本語学校が誕生します。これは現在世界各国にある日本人学校や補習校とは異なります。

「子孫に日本語と文化を伝えるための、自分たちの〝寺子屋〟でした。木を切って製材するところから始めた手づくりの学校です」

ピラポ移住地には六つの村があり、村ごとに保護者でお金を出し合って学校を運営しはじめました。初期には教材もそろわず、ランプのもとで教科書を手書きで写して準備したそうです。

「先生といっても資格を問うわけではなく、ボランティアのような形で私もかかわりはじめました。当地ではほとんどの家庭でおじいちゃん、おばあちゃんと同居し、ふだんの会話も日本語でしたから、すんなりと日本語で伝えることができました」

でも、そのうち日系社会も変化していきます。

「都市に住むようになると、周囲がスペイン語環境になります。そして家庭でもスペイン語を使う人が出てきます。日本語学校でも日本語だけでは通じず、スペイン語で媒介する必要が出てきます。だから都市と地方（移住地）で授業方法や教材も変わってきました。これまでピラポでは日本の光村図書の国語教科書やそれに伴う教材を使い続け、作文もそれなりに書ける環境にありました。でも現在は、四世の子もいれば、お母さんがパラグアイ人やドイツ人の家庭も増え、一斉授業をするのが難しくなりました。何年か前にクラスを分けたこともありますが、非日系人の方が長続きしなくて、またいっしょにしました。ずっと試行錯誤です」

移住地の日系人の人口が少なくなっていき日本語学校の生徒数も減少しました。一九九九年にはピラポ移住地にあった四校の日本語学校は「ピラポ日本人会立ピラポ日本語学校」として、一校に統合されました。現在は一六六人の生徒が通い、JICAや日本人会の助成を受けつつ、保護者の月謝で運営しています。工藤さんはピラポ日本語学校の校長を務め、いったん退任するも呼び戻され、通算二十七年間日本語教育に携わりました。現在は工藤さんをはじめ一世の先生は引退され、教え子である現地生まれの二世や三世の世代が先生を務めています。

「私の孫も先生になって四年目です。後継者ができたようでうれしいです」

工藤さんの熱意により、工藤家は三世代にわたって日本語が母語として継承されています。

「孫たち（愛さんや雄介くんたち）はピラポに来ると、日本から取り寄せている本や雑誌にかじりついています。いまはテレビなどで耳から語彙が入ってきているから、〝ばあちゃん、その日本語変だよ〟と孫に指摘されて、タジタジしていますよ」

パラグアイの日本語学校も、世界各国の継承語教育と同じ悩みを抱えています。

「これまでとは変わってきていますから、臨機応変な教材や指導法の見直しが必要でしょう。大人には目的意識があっても、子どもは親に言われてイヤイヤ来る子もいます。でも大きくなって日本に行く機会が増えて、『先生、日本語習ってよかった』と言ってもらえるのが、何よりもうれしく思います。いまは親も経済的に安定してきて、子どもが望めば上の学校に行くことができる時代になりました。いろいろな文化を身につけて、私たちが目標と掲げていた〝パラグアイに役立つ日系パラグアイ人〟になってほしいと思います」

日本語学校の先生たち